

令和3年度 興南高等学校 入学試験問題

前期

国語

令和3年1月16日（土）実施 50分／100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は50分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、中学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。

① 厳しい都市の環境で生きていくためには、逃げてばかりはいられない。時には助けあつて立ち向かっていかなければならない状況もある。道端に生えるホソウリゴケの場合、コケの個体が寄り添ってクッションをつくり、水の保持力をあげていることを紹介した。^{*}
こうした助け合いは種の垣根を越えて存在する。

木の幹のコケのマットをよくカンサツ^aしてみよう。遠くからみるとただの緑の塊^bに見える。でも、コケに顔を近づけてみると……いろいろな種類のコケが混ざつて生えていることに気がつく。糸くずのようなものから、小さなクッション、ペタンと平たいコケまで、その形もへ A へ。都市の街路樹でよくみかけるのは、ヒナノハイゴケ、コゴメゴケ、コモチイトゴケ、タチヒダゴケなどであろうか。このようにいろいろな種類のコケがみられるのも、コケたちの美しい友情のおかげなのだ。

垂直の木の幹にコケの種である胞子が定着するのは難しい。運よく木の割れ目に胞子が入ったとしても、ひとたび雨が降れば、木の幹をしたたる雨水とともに下に流されていってしまう。しかし、チヨウセン^cを繰り返しているうちに、たまたま幸運に恵まれた胞子が定着することがある。こうなればしめたもの^③。幸運なコケは少しずつ大きくなり、晴れて木の幹にコケのマットをつくるようになる。

一旦木の幹にコケのマットができたなら、このマットを足場にして次々に他のコケが侵入してくる。これは、日々の掃除からもソウゾウ^dししやすい。絨毯^{じゅうたん}の目のなかに糸くずやほこりがくっついて掃除機でなかなか吸いとれないように、コケのマットに入った胞子はちよつとやそつとの雨や風では落ちることがない。おまけにコケのマットには適度な湿度もあり、発芽直後の乾燥に弱いコケが生き延びるうえでも都合がいい。こうしてコケのマットの恩恵^{あづか}に与かった新参者のコケは、すくすくと生長を続ける。そして、やがてはコケのマットにへ B へがみられることになる。

でも、このコケ同士の助け合いに、どこか^④稔然しやぜんとしない人がいるかもしれない。厳しい自然界では、ときに生物は非情である。限られた資源をめぐって、同じ種であつても容赦ようしやない争いを繰り広げることさえある。場合によっては恩を仇あだで返すがごとく、先住のコケを足がかりにして、新しく入ってきたコケがはびこってしまうかもしれない。特に、樹幹のような広くもない環境では、生物同士の争いも激しく、まさに生き馬の目を抜く世界。助け合いなどという生易しいことはいつていられないはずだ、と。

しかし、樹幹のコケを見る限り、^⑤こうした争いはあまり起きていないようだ。これには、二つの理由がある。一つ目は、コケにとつての樹幹の環境は厳しく、生長スピードが抑えられていることだ。地面から離れ、風や大気にさらされている樹幹は乾燥しやすい。乾燥に耐えることができるコケであつても、都市の樹幹の環境では生長が制限されがちになる。こうした環境下にあるコケは、今ある個体を^⑥イジするのがやつとで、他の個体と争って陣地を拡大するほどの余裕はないのだろう。

二つ目は、コケが他の種と共存することで、より多くの水分を保持できるようになることだ。コケのマットに別のコケが生えると、相乗効果でより目のつまつたコケのマットになる。目の粗いスカスカしたマットに比べ、ぎゅつと目のつまつたマットはより多くの水を保持することができる。つまり、他のコケと一緒に生えることで、既存のコケにも利益があるといえよう。厳しい都市だからこそ、コケたちは種の垣根を越えて助け合つて必死に生きている。街路樹をおおう小さな緑のマットには、ひそかに美しい助け合いに満ちていたのだ。

「中略」

ここで、コケの形と環境との関係について考えてみよう。例えば、扇型のコケがどんな環境に生えやすいだろうか。前提として、植物であるコケはへCへ。しかしへDへ。効率よく光を受け取るためには、へEへ。ただし、どんな環境でもこの形になれるわけではない。へFへ、乾燥に弱くなつてしまうためだ。以上の関係を考慮すると、扇型のコケが見られるのは、暗くしっとり

とした森に限られることになる。このように、コケの形は、光・水環境と密接な関係がある。

【大石 善隆 「コケはなぜに美しい」 NHK出版新書 ※問題作成の都合上一部改変】

【語注】

* 紹介した 前章でホソウリゴケについて述べられている

問一 二重傍線部 a↘ e の漢字の読みをひらがなで、カタカナは漢字で答えよ。

a よくカ|ン|サツ|してみよう

b 緑の塊|に見える

c チョウ|ウ|セン|を繰り返して

d 日々の掃除からもソウ|ゾウ|しやすい e 個体をイジ|する

問二 傍線部①「厳しい都市の環境」とはどのような環境か。「環境」に続くかたちで本文中から六字で抜き出して答えよ。

問三 傍線部②「助け合い」とあるが、これを別の表現で言い換えた部分を本文中から五字で抜きだして答えよ。

問四 へ A へ に入る四字熟語として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 千差万別 イ 五里霧中 ウ 心機一転 エ 粉骨碎身

問五 傍線部③「しめたもの」、④「釈然としない」の本文中における意味として最も適当なものを、次のア～エからそれぞれ選び、

記号で答えよ。

③ 「しめたもの」

- ア 思い通りにうまくいく。
- イ 幸運な出来事にめぐまれる。
- ウ 先の方向性が示される。
- エ 自分が独占できる。

④ 「釈然としない」

- ア 納得がいかず、苛立ちを覚える。
- イ 裏切られて不愉快な思いをする。
- ウ 疑問が晴れずにもやもやする。
- エ 特に感動を覚えなない。

問六 へ B へに入る語句として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 弱いコケ
- イ さまざまなコケ
- ウ 新種のコケ
- エ 生命力の強いコケ

問七 傍線部⑤ 「こうした争い」とあるが、具体的にどのような争いか。該当する部分を本文中から抜き出し、「く争い」に続くかたちに書き直して一〇字で答えよ。

問八 文章を論理的に展開するために、へ C へ F へに入る内容として最も適当なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ア 暗い森の中では光を十分に受け取れない
- イ 平たくなればなるほど、まわりの環境と接する面積も広くなり
- ウ 平たい扇のような形になって面積を広くするのが理想的だ
- エ 光合成をしてエネルギーを得なければならない

【二】次の文章を読んで後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧^①に記入せよ。

「ぼく」（先生）は、自宅で小さな画塾を営んでいる。ある日、太郎という少年が若い継母*1に連れられてやってくる。父親の大田氏は画材会社を営み、とても裕福で何不自由ない生活を送っている。また、継母はことさら躰しつけに厳しいため、太郎はいつも身ぎれいでお行儀がよく、両親の言いつけをよく守る少年であった。太郎がこれまでに描いたスケッチブックを見ると、どれも余白だらけで、描いているものは決まりきったチューリップの絵ばかりで、人物は一枚も書かれていなかった。

いわれるままに太郎は次の日曜から画塾へやってきた。ぼくは大田夫人に電話して、自動車できたり、女中*2がつきそつたりすることは極力さけるようにたのんだ。また、太郎が絵具箱やスケッチブックをもつてくることにもぼくは反対した。紙や絵具や筆はすべてほかの子供と同じ画塾のものを使い、どんな意味でも障壁しょうへきが生まれることをぼくは警戒したのだ。太郎はアトリエにやってくると膝を正して床にすわり、ぼくがいうまで姿勢をくずそうとしなかった。ぼくは子供に画の技術を教えない。どう描いたらよいのかと聞きにこられると、ぼくはさりげなくほかの話をして子供が強いイメージを得るまで画から遠ざける。*3フォルムや均衡きんじうや遠近法の意識はぼくが手をとって教えなくても彼らのなかにちゃんと埋もれているのだ。ぼくはそれを蔽おほう破片の山をとりわけ、彼らに力をわかせる助けをするだけだ。彼らが自分で解決策を発見するまで**ぼくは詩人①になったり童話作家②になったりして**彼らの日常生活のなかを歩きまわり、ときどき暗示を投げるのである。電車を一台きり描いて筆②を投げた子供は、ぼくがたずねると「これはね、終点ちゆうてんについたところなんだよ。みんなおりてしまったんだよ」

たいていそんな巧妙こうみょうなとっさの知恵をはたらかせて逃げようとするが、こちらも負けてはいられない。ぼくは紙をとりあげて感

嘆するのだ。

「なるほど、こいつはおもしろいや。だれもないじゃないか。みんないつちやっただね」

いそがしく頭をはたらかせてぼくは彼が熱心な野球ファンであったことを思い出す。そして膝^③をたたくのだ。

「わかったよ。みんないつちやっただ。みんな球場へ見物に行っちゃっただ。なるほどね。早くいかなきゃ席がとれないぜ……」
子供はへ A 〽口をすべらす。

「バカいつてら。ぼくは指定席だぜ。パパと行くときはネット裏にきまつてるんだぜ」

彼は口をとがらせて抗議し、身ぶり手ぶりを入れて球場の歓喜を説明しはじめる。ぼくは頃合いをみてそと彼の前に新しい紙と絵具をおくのだ。彼の眼の内側に、やがて白球がとび交い、群衆が起き上がれば、耐えられなくなって彼は絵筆をとる。ほんのちよつとしたきっかけで、無人の電車は帰途の超満員電車にまで発展するのだ。

ところが、太郎は何日たつても画を描こうとはしなかった。自分のイメージに追われて叫んだり、笑ったりしている仲間の喧騒^{*4けんそう}をよそに、彼はひとりぼつんとアトリエの床にすわり、ものうげなまなざしであたりを眺めるばかりだった。いつ見にいつても彼の紙は白く、絵具皿は乾き、筆も初めにおかれた場所にきちんとそろえられたままだった。泥遊びの快感で硬直がほぐれることもあるので、ためにフィンガー^{*5}・ペイントの瓶を差し出してみると

「服が汚れるとママに叱られるよ」

彼はそういつて細いへ B 〽をしかめ、どうしても指を瓶につっこもうとしなかった。きちんと時間通りにやってきて一時間ほどしんぼうづよく座っては帰ってゆく彼の小さな後ろ姿をみると、ぼくは^④大田夫人の調教ぶりに感嘆せずにはおれなかった。

「中略」

ぼくは初めて差別待遇をした、月曜日は太郎は家庭教師もピアノ練習もない日だったので、僕は彼をつれて川原へでかけたのだ。太郎をつれて駅にゆくと、ぼくは電車にのり、つぎの駅でおりました。そこから堤防まではすぐである。ぼくのいそぎ足に追いつこうとして太郎は絵具箱をカタカタ鳴らしつつ小走りに道を走った。月曜日の昼さがりの川原はみわたすかぎり日光と葦*あしと水にみちていた。対岸の乱杭*らんぐいにそって一隻せきの小舟がうごいているほかにはひとりの人影も見られなかった。小舟は進んだりとまったりしながらゆつくり川をさかのぼっていった。広い空と水のなかでひとりの男がシガラミ*8をあげたり、おろしたり、いそがしく舟のなかでたち働く姿が小さくみえた。ぼくは太郎をつれて堤防のむらをおりていった。

「あれは魚をとってるんだよ」

「……」

「こんな大きな河でもウナギやフナの通る道はちゃんときまっているんだ。だからああして前の晩にシガラミをつけておくと、魚はこりやいい巢くがあると思ってもぐりこむんだよ」

橋脚きょうかくだけのこされたコンクリートの橋のしたでぼくと太郎は腰をおろした。橋は戦争中に爆撃されてからとりこわされ、すこしはなれたところに鉄筋のものが新設された、強烈な力の擦過*ささつかした痕跡こんせきは、いまは川の中に取り残されたコンクリート柱だけで、爆弾穴は葦と藻もに蔽おほわれた、静かな池に変わっていた。太郎は腰をおろすと、絵具箱を肩からはずし、スケッチ・ブックをあげようとした。ぼくはその手をとどめて、右の眼をつぶってみせた。

「今日は遊ぼうや。カニでもとろうじゃないか。」

「だって、ママが……」

ぼくはつぶつた眼をあげ、かわりに左の眼をつぶって笑った。

「画は先生がもって帰ったっていえばいいよ」

「うそをつくんだね？」

太郎はませた表情でぼくの顔をのぞきこんだ。ぼくはだまってたち上がると、葦の茂みのなかへ入っていった。

葦をかき分けて歩くと、一足ごとに、泥がそのまま流れるのではないかというほどおびただしい数の川ガニがいっせいに走った。ぼくは太郎といっしょに彼らを葦でつぶしたり、つかまえたりした。はじめのうち太郎は泥がつくことをいやがっていたが、そのうち靴にしみが一点ついたのをきっかけに、だんだん大胆に泥のなかへふみこむようになった。カニを追うたびに彼の手は厚く温かい泥につきささり、爪は葦の根にくいこんだ。やがて彼がひとりで小さな声をあげつつ茂みのなかを這いまわりはじめた頃をみはからって、ぼくはあたりに水たまりがないことをみとどけ、もとの爆弾穴のほりへ戻った。

ぼくが葦笛を作る事に没頭していると、しばらくして太郎が手から水をしたたらせてもどってきた。彼は足音をしのばせつつやってくる、ぼくのまえにたち、青ざめて

「先生、コイ…」

そういったままあえいだ。

「どうしたんだい？」

「コイだよ、先生。コイが逃げたの」

彼はぬれた手でいらだたしげに額の髪をほらい、ぬき足さし足で池にもどっていった。そのあとについていくと、彼は水辺でいきなり泥のうえに腹ばいになった、ぼくは彼とやらんで葦の根もとにねそべり、おなじように池のなかをのぞきこんだ、ぼくの腕のよこで太郎の薄い肩甲骨がうごいた。彼は温かい息をぼくの耳の穴にふきこんだ。

【語注】

*1 継母 実母でない母、血のつながらない母

*2 女中 家庭に雇われて炊事・掃除その他の用をする女性、お手伝いさん

*3 フォルム かたち、形式

*4 喧噪 騒いでいること

*5 フィンガー・ペイント 指で画を描くこと。クレヨンやペンなどを使わず、自分の体を使って楽しむ技法

*6 葦 イネ科の多年草、沼や川の岸に大群落をつくる

*7 乱杭 水底に数多く不規則に打ち込み、治水、護岸の為に乱立させている杭

*8 シガラミ 水流をせき止めるために川の中にくいをうち並べて、それに木の枝や竹などを結びつけたもの

*9 擦過 かすること

問一 傍線部①「ぼくは詩人になったり童話作家になったり」とあるが、具体的にどうすることか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 「ぼく」が絵画に文学的な表現を取り入れ、子供の興味や関心を増幅させ創作意欲をかきたてること。

イ 「ぼく」自身が詩や物語を作り、子供が絵に描きたくなるような想像の世界を与えてあげること。

ウ 「ぼく」が子供自身の体験を想起させるストーリーを会話に織り込み、子供自身の興味に気づかせること。

エ 「ぼく」が子供の代わりに言葉で表現することで、子供が忘れてしまった過去の体験を思い出させること。

問二 傍線部②「筆を投げた」、③「膝をたたく」の本文中における意味として最も適当なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

② 筆を投げた ア 興味もなく絵を描いている イ イメージがわからず諦めている

ウ 技術が未熟で巧く描けない エ 投げやりに絵を描いている

③ 膝をたたく ア 悔しがつている イ 我慢している

ウ 策を立てている エ 得心している

問三 本文中の「A」・「B」にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア A ぺらぺらと B 眉を イ A 突然に B 口を

ウ A うっかり B 眉を エ A まんまと B 口を

問四 傍線部④「大田夫人の調教ぶり」とあるが、「ぼく」はこれにより太郎がどのような状態にあると考えているか。最も端的に表した語句を本文中から二字で抜き出して答えよ。

問五 傍線部⑤「足音をしのばせ」とあるが、それと同じ様子を表現した言葉を本文中から六字で抜き出して答えよ。

問六 「中略」より後の「ぼく」の「太郎」に対する思いとして、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 「ぼく」は厳しい躰に辛抱強く我慢する太郎を解放しようとする日を設定したが、太郎が「ぼく」を意識し絵を描き始

めたことに失望したが、優しい笑顔と嘘で太郎を救おうと励んだことで画塾の方針通りに向かいそうだと満足している。

イ 「ぼく」は車や女中付きで画塾に通う太郎の環境が絵の描けない要因だと思い自然の中で鍛え直そうと考えたが、母親に嘘をついて遊ぶことに抵抗を感じ、強いられた遊びを消極的にこなそうとする太郎に対し辛抱強く付き合おうと思っている。

ウ 「ぼく」は画塾で小さくなっている太郎の緊張をほぐそうと外で特別に遊ぶ機会を設けたのに対し、太郎は初めこそ母親を意識し絵を描こうとしたが、遊ぶ決心をして活発になりはじめた太郎の様子に安心し、頼もしさを感じはじめています。

エ 「ぼく」は画塾でものうげな絵しか描かない太郎を自然に触れさせ刺激しようとしたのに対し、太郎は苦手な状況から逃れようと絵を描こうとしたが、遊びの楽しさを知り熱中し始めた太郎ならいい絵が描けるだろうと期待している。

問七 本文の表現上の特徴について当てはまらないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 比喩表現が多用されており、自然の美しさや生き物の営みをいきいきと臨場感をもって伝えている。

イ 太郎が川で遊ぶ時の動きや息遣いを詳細に描くことで、画塾での様子との違いを際立たせている。

ウ 前半と後半では太郎の会話の量や表現が変化していることから、太郎の心境が変化していることが分かる。

エ 場面の描写が詳細で、戦時にできた爆弾穴が現在では生き物の生息地であるという皮肉を読者に訴えている。

問八 本文の作者開高健は、昭和三十二年に芥川賞を受賞している。この賞は芥川龍之介の功績を記念して創設されたものであるが、芥川龍之介の作品を次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア それから イ 人間失格 ウ 生まれ出づる悩み エ 山月記 オ 蜘蛛の糸

【三】次の文章は琉球王朝時代、尚清王（第二尚氏四代）の冊封使（中国からの使者）として来琉した陳侃の著した『使琉球録』の一節を和文に改めたものである。後の〈現代語訳〉を参考にして以下の文章を読み、後の問いに答えよ。

二十五日の夕、台風暴雨倏忽して至り、茅舎皆席巻せらる。予の館もまた兀兀として安んぜず、寝ぬることあたはざれば、起きて中堂に座す。門牆四壁蕩然として存するは無し。因りて念ふに、港口の船恐らくはつなぐに及ばざれば、人を遣りてこれを視せしむ。皆いはく、昏黒くして牛馬をわきまへず。しかるに岐路いづくんぞ分かつべき。何ぞこれを待たざると。風雨はたして悪しく、またしひて質だすべからず。

明けて往くに、王すでに法司官をつかはし、夷人数百をひきゐて舟側を守らしむ。舟人にこれを問ふに、すなはち夜半時に至るなり。法司はまた夷官の尊者なり。かつ路はるかなるに避けずして来る。予因りて嘆きていはく、「華夏の人、風雨晦冥の夕には向をふさぎ戸を閉め、もつてこれを避くるになほ恐れ、いまだ安んぜず。風を衝き雨を冒して行く者、必ずそれ骨肉なれども顛沛して入れざるのみ。たれかよく他事を家事のごとく見て、艱険を辞せざる者あらんや。夷の君臣それまた感ずべきなり。」と。

〈現代語訳〉

二十五日の夕刻、台風と大雨が突然やってきて、茅葺きの家はすべて吹き飛ばされてしまった。私の（宿泊している）館もまたゆらゆらとして、安心して寝ていることへ、できないかったので、家の中堂に起きて座っていた。四方の扉や窓は跡形もなくなつて

しまった。そこで、港口に停泊中の封舟は、おそろくつなぎ留められなかったのではないかと心配されたので、人をやって見させた。(見させた) 人々が皆、真つ暗で牛か馬かの区別すらつきません。それなのにどうして路がはつきり分かりましようか。(いや、分かるはずがありません。) どうしてお待ちにならないのですか。(お待ちになるのがよいでしょう。) とのことであった。風雨がひどく、それ以上は無理に行かせることはできなかった。

夜が明けて港へ行ってみると、(琉球の) 王はすでに法司官を遣わして、琉球の民数百人を指揮し、舟を守らせていた。船員にこのことを尋ねると、夜半頃にやって来たとのことであった。法司といえば、琉球の高官である。(首里から那覇への道は) (A) であるように、避けようともせず来てくれていたのである。私はそれを嘆き、「中国の人は、風雨で真つ暗な夜は窓をふさぎ戸を閉めて、風雨を避けているにも関わらず (B) 恐れ、不安げにしている。風をおして雨をかえりみずに行く人は、たとえ骨肉であってもうろたえて(家の中に) 入れてもらえない。誰か他人のことをまるで自分のことのようにとらえ、危険をかえりみない人が(中国) にいるだろうか。琉球の君臣のことを肝に銘ずべきだ。」と。

問一 二重傍線部 a 「ひきゐて」・ b 「すなはち」・ c 「もつて」の本文中における読みの組み合わせとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|-----|---|---|------|---|------|---|-----|
| ア | a | ひきいて | b | すなわち | c | もつて | イ | a | ひきるて | b | すなはち | c | もつて |
| ウ | a | ひきるて | b | すなわち | c | もつて | エ | a | ひきわて | b | すなはち | c | もつて |

問二 波線部 A 「はるかなる」・ B 「なほ」の本文中における意味として最も適切なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。〈現代語訳〉中の (A) 〳 (B) 〵にはこの意味が当てはまる。

A はるかなる ア すばやく移動できる イ 遠く隔たっている ウ はつきりしない エ 先が見えない

B なほ ア 依然として イ ひたすら ウ 並々に エ むやみやたらに

問三 傍線部①「寝ぬることあたはざれば」について以下の問いに答えよ。

1 現代語訳に改める場合、「寝ぬること」と「あたはざれば」の間に補ったほうがよい助詞を一字で書け。現代語訳中の△にはこの助詞が当てはまる。 ▼

2 誰が寝ることができなかったのか、本文中から抜き出して答えよ。(注 現代語訳からは抜き出さないこと)

問四 傍線部②「人を遣りてこれを視せしむ」について以下の問いに答えよ。

1 「これ」とは何か、本文中から四字で抜き出して答えよ。(注 現代語訳からは抜き出さないこと)

2 ②の理由を説明した次の文のX・Yに当てはまる語句を、指定字数に合わせて現代語訳中から抜き出して答えよ。

(X 〓六字) なっていたので、筆者は「これ」が流されてしまったのではないかと (Y 〓五字) から。

問五 傍線部③「岐路いづくんぞ分かすべき」とあるが、ここに用いられている表現技法として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 比喩法 イ 倒置法 ウ 反語法 エ 対句法

問六 傍線部④「これ」の内容として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 筆者の家がどれほど揺れて破損したのかどうか。 イ 昨晚の首里から那覇までの道のりがどれだけ暗かったのか。

ウ 琉球の王がなぜこれほど多くの兵を連れてきたのか。 エ 琉球の役人と民がいつからやってきて舟を守っていたのか。

問七 傍線部⑤「嘆きて」について以下の問いに答えよ。

- 1 ここでの筆者の心情を表す言葉を本文中から二字で抜き出して答えよ。(注 現代語訳からは抜き出さないこと)
 - 2 1はどのようなことに対するものか。適当なものを次のア～カから二つ選び、それぞれ記号で答えよ。(順不同)
 - ア 遠路はるばる冊封使としてやってきたのにも関わらず、台風で吹き飛ぶ程度の庶民と同じ粗末な家をあてがわれたこと。
 - イ 封船が心配で見に行きたくとも制止されてかなわず、琉球王と法司官に依頼したが満足のいく働きではなかったこと。
 - ウ 自国の側近は口先だけ勇敢で忠実に役目を果たさないが、琉球王の側近は危険を顧みず役目を果たそうとすること。
 - エ 琉球の法司官は高官であるにもかかわらず、異国の船を守るため悪天候と遠路をいとわず未明からやって来ていたこと。
 - オ 琉球人が常に親切な対応するのに比べ、中国本土の人々は常に自分を優先し家族にさえも厳しい態度をとること。
 - カ 筆者の本国ならば悪天候を恐れ身内に対しても厳しく処するが、琉球人は異国民の境遇を私事として親切にすること。
- 問八 文章中の表現についての説明として誤っているものをア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 『使琉球録』は漢文で書かれた紀行(日記)文であり、和文に翻訳された本文も漢文訓読体で、漢語が多く用いられている。
- イ 「牛馬をわきまへず」のような身近な動物から成立した語句は、「牛を馬に変える」の語句同様、農耕文化圏に散見される。
- ウ 「夷人・夷官」の「夷」は、日本の「えぞ・えみし」、中国の「蛮夷」同様、文明未開の意味で差別的に用いられている。
- エ 「華夏」は大きな中国の意で中国人が自国を誇る場合に用い、冊封使派遣への感謝と記録を報告する意識で書かれている。

※問題は以上